

カラフルな世界

弘前市立第一中学校

齋藤 久歌

対象作品／森絵都著『カラフル』理論社

コロナ禍に入ってから、自殺に関するニュースをよく目にするようになった。実際、調べてみるとコロナ禍に入ってから自殺者数は増えているそうだ。調べた記事の中には、わたしと同じ十代や二十代の若い世代で自殺をする人が増えているという記事もあった。もしかしたら、わたしの身近な人達の中にもそうなるってしまう人がいるかもしれないと不安になった。そんなときに読んだのがこの本である。主人公は、生前の罪により輪廻のサイクルから外されたある魂で、自分の罪を思い出し、再び輪廻のサイクルへ戻るために、自殺を図った少年、小林真の体を借りて現世で修行を積むという内容である。不倫した母親、上司が検挙されても自分が昇進したことを喜ぶ父親、嫌味ばかり言う兄、中年の男性とラブホテルに入っていく初恋の相手、めんどくさいくらいにつきまといってくる同級生など、たくさんの人がこの話には登場する。だけれども、これは始めに主人公が決めていたそれぞれのイメージであって、話が進むにつれて、その行動の理由や

その行動をするまでのそれぞれの心の変化が見えてくる。そうやって知っていくうちに、主人公のそれぞれに対するイメージが変わっていき、見える景色も広がっていく。

わたしたちは一人一人色とりどりの個性をもっている。それを認め合い、受け入れていくことが大切なことだとわたしは思う。当然人には合う、合わないがあるので無理をして受け入れるべきとは言えない。が、世の中には自分と少し違うからといって人の個性を頭から否定し、その色を消してしまおうとする人がいる。こんなに広い世界で、たくさん色が溢れているのだから、自分と同じような色を探すほうが困難である。その色を受け入れられないのは仕方ないとして、頭から否定するのではなく、一度その色を美術館で絵をみているときのようにじっくりと観察してみると、自分が気がつかなかった新しい色が発見されるかもしれない。たとえばその色が自分とは合わない色であつても、その色がその人の中でどのように作られていったのか、その色がその人にとってどの

ような役割を果たしているのか、じっくりとみて考えていくうちに、その人を見る目は変わっていくだろう。

わたしの中にはきつと、まだわたし自身も知らない色がたくさんある。わたしだけではなく、たくさんの人がそうだろう。ならば、お互い知らなかった色を教え合うこともいいのではないか、とわたしは思う。そしたら、自分を知ってもっと生きやすくなるかもしれない。

さんざん観察することや見るのが大事だと語ったが、それと同時に覚悟をもつことも大事だと思う。色を見る覚悟である。個性や感性という色は、人にはなくてはならないものだ。だとわたしは思う。だからこそ繊で大切にしなければならぬ。いくら分析のためだといっても、ズカズカと軽い気持ちで入っていくものではないと思う。今まで知らなかったことを知ろうとする分、知りたくなかった色の存在まで知るかも

しれないのだ。だから、知ろうとするなら知ろうとするなりの覚悟をもつて色をみるのが大事だと感じたのだ。

世界にはたくさんの方がいる。その人の数だけ色が溢れている。世界はともカラフルである。そのカラフルな世界をわたしは少しずつでも知っていききたい。この本の主人公のように。少しずつ、少しずつ苦労したとしても。そして、みんなとお互いの色の良いところも、悪いところも受け入れて認め合っていきたい。そしたらきつと、もつともつと世界は鮮やかでカラフルになっていくのではないだろうか。たくさんでなくても、お互い色を認め合える人が一人でもいれば、生きやすくなる人が少しでも増えるのではないだろうか。お互いを認め、支え合うことがあたり前になればいいなど、この本を読んで強く感じた。